
黒竜の雛

守野 栴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜の雛

【Nコード】

N7413F

【作者名】

守野 櫛

【あらすじ】

新学期が始まったばかりの大学生・進藤匠^{しんどうたくみ}は、いつものように“日常”を経験していた。だが、彼はある日突然、“非日常”の世界に投げ出されることになる。人の魂を鬼火^{たましい}に変え、己の体内へ取り込む謎の男、フェスに襲われたのだ。匠の“日常”生活は終わりを告げた。しかし、同時に彼の前に一人の少女が現れる。少女はフェスから匠を守るため、彼のそばで生活を始めるというが…、魂と魄^{たましいはく}をめぐる、奇妙なソウル学園ストーリー！

プロローグ

その日。

その日も、進藤匠^{しんどうたくみ}は当たり前に自分の日常を経験していた。大学二年の四月末、新しい環境にもそこそこ慣れ、将来について真剣に考える時期もはるか向こうにある。友人も何人かできた。

家庭はごく普通。（この場合、本人が普通だと思っ^ていても実は、他人からしてみれば、普通でない場合が多い）ふたり兄弟で、親はいる。

しかし、今は妹がホームステイ中で、母親と二人暮らしだ。

成績は中学の時から、中の上下を行ったり来たりしている。自分を磨こうと思うほどの気概はない。しかし、怠け過ぎても恐いので、適度に努力する。

そのせいか、微妙に要領がいい、と中学以来の友人である^{まなづ}学に言われたことがある。

彼女はいない。

隣の席の多田美穂^{ただみほ}に何くれとなく話しかけてはいるが、これは彼女に宿題等の援助をしてもらうためで、それ以上深くは考えていない。最近^{さいきん}は、焦って探すこともないと思っている。

目下の悩みは、迫るゴールデンウィークのお金の使い方ぐらいだろうか。

いつもの友人たちとどこかに出かけるのもいいけれど、買いたいゲームやマンガもいくつかある。その日の放課後に、市街地に足を向けたのも、ゲームと本を物色して、そのあたりの目星をつけようと思っ^たたからだっ^た。

この時まで、彼にはそんな日常がいつまでも続くものだと思っていた。

いや、そんな自覚すらなく、ただ単にこれが世界のすべてだと思いこんでいただけなのかもしれない。

血のように淡く光る夕焼けの中で、匠たくみの生活はあまりにあっけなく燃え尽きたのである。

あるいは正確には、燃え上がったのかもしれない。

まるで竜がより高みを目指して、飛翔するかのように。

第2話 外れた世界

学校から出ると、匠は一人、校舎前の停留所から市街地行きのバスに乗った。^{たくみ}

このバスに乗るようになってから、ちょうど一年一か月が経過したことになる。

すでに見慣れた窓の景色に目をやりながら、匠はひととき回想に沈んだ。

最近、ひどい耳鳴りに悩まされている。

耳鼻科にも行ったが、原因はわからないという。

一種のストレスによるものと医者は判断したが、匠自身はそれに納得していなかった。

ストレス？

このおれが？ ありえない。むしろ、なさすぎて困るくらいだ。

大学での生活は、案外そっけないものだった。

朝から夜まで研究の毎日だと思っていたのは、まちがいで、へたをすれば小学生低学年並みにやることがない。

二年だから暇なのかもしれない。三年では、それこそ学科へ所属される年だ。きつと、今よりおもしろいにちがいない。

そんな淡い期待を胸に抱きながら、匠は繁華街に差しかかったバスの外を眺めた。

いつ来てもにぎやかな場所だ、と思う。

そこに流れる空気は一種、独特なものがあつたし、人々を引きつける何かがあると匠は信じていた。

バスが目的の場所へ到着し、乗客がそれぞれの目的地へと旅立っていく。

大げさかもしれないが、実際、そうなのだ。

匠もゲームの聖地、「パラダイス・オブ・ゲーム」を目指す。

これは店の名前で、こんなふざけた店名でよくお客が入るな、と思

いながらも、そのイメージのインパクトからか、客足に困ることはなさそうだった。

「またか…」

ひどく耳鳴りがしている。耳をふさいでも止まることはない。体の内側から発せられる音だろうから、止まらないのは当たり前だが、よくもこんな振動が身体から発生するものだと感じる。

工事現場の振動とも似つかないそれは、まるで巨大な生き物がこの街を徘徊するがごとく、空気中の分子を震わせていた。はつきいって耐えられるものではなかった。

気にしだすと、震音は一層の激しさを持って、匠の体に襲いかかる。

「くそ、今日は一段とひどいな…」

まともに歩くこともできなくなり、そばにある街路樹にその身を預ける。

ちからがぬけ、その場にどすつとすわりこんだ。街路樹の下はちょうど日陰になっており、これですこしは楽になりそうだった。

「大丈夫…？」

匠が見上げると、学校帰りらしい少女が心配そうにこちらを見つめていた。

「いや、大丈夫ですよ。ちょっとつかれただけなんで…」

いまどき、見知らぬ他人を心配する少女に頭が下がる思いだったが、匠は本当の原因については言わずにおいた。言っても、彼女はその対応に困ってしまうだろう。

「だれも気づいていないのか…」

「は？」

匠はいま聞いた言葉を疑った。いや、正確にはそれを発した人、にだ。

「君は、聞こえないのか？」

（え？ なにが…、というか、男言葉…？）

彼女の大人びた様子に、内心どぎまぎしながらも、匠は平静を装って答えた。

「いやー、ほんとうるさいよね、町中って。でもおれはもう大丈夫だから、心配しなくていいよ、ってあれ？」

最初は何が起きたのかわからなかった。

ただ、日中であるはずのいまが、突然、暗闇に変わったことをのぞいては。

「はじまつたか…」

彼女と思われる人物がつぶやいた。真っ暗闇で何も見えないので、たしかではないが、そのおとなびた声色から彼女であると思われた。

「どうなってるんだよ、これは…」

皆既日食か、それとも、月食か？

でも、そんなことニュースで言っただろ…。

それとも、予期せぬ隕石接近か？　大停電か？　それとも、や

っぱりテロか？

考えられる可能性はいくつもあつたが、そのどれもが現実味を持たなかつた。

「案山子だ」

「かし？」

聞きなれない言葉を耳にして、匠はおもわず、口の中で反すうした。

「知っているとは思うけど、人に見せかけてカラスなどから畑をまもる、あれだ」

(……………、うん？　　)

なにをいつているのだろうか？　冗談でも言っているつもりなのだろうか。

それならば、いやおうがなんでも返答しなければ、失礼というものだろう…。

だが、一体どう返せばいい？　たのむ、たのむから、ユーモアの神様よ、いまだけでいい。

いまだけでいいから、どうかおれのもとへ舞い降りてくれ…！

これが匠の正直な感想だつた。

もちろん、わらいの神様が早々に舞い降りるはずもなく、匠は、だまりこんだままだつた。

「君は、早くおうちへかえりなさい」

少女は、匠の反応に特別、機嫌を損ねたわけでもないらしく、諭すように優しく言った。

「あなたは？」

「わたしは、案山子を喰い止める」

食い止めるって、どうやって？ かかしてこの不可解な現象のどこか…？

聞きたいことは山ほどあったが、とりあえず、匠は目的のゲームを買いに行こうとした。

木のそばを離れ、噴水がある広場の中央にでる。

ここで驚くべきことが明らかになった。

なんと、多数の人形が広場に陳列してあるのだ！

その人形は一体一体、多種多様の服を着せられていた。あるものは、学生服。また、あるものは、通勤用のスーツ一式となかなかの品揃えである。

バーゲンセールでもやっているのだろうか、でも、こんなさつきはなかったよな？

一連の疑問は、人形たちに近づいた時にあっさり解けた。

これらは人形ではない。人だった。たくさんひとのあつまりだった。

不自然な格好をしたまま静止したそれは、生気がなく、まるで微動だにしない。

たしか、このような光景を本で読んだことがある。

一人のロボットに改造されたおとこが、町に出てみると、行きかう人々が死んだように動かなくなっていたという話だ。

彼は、サイボーグになっていたため、一人だけテロの被害にあわず、

動けまわれたという。人々が動かなくなった原因は、上空から散布された麻酔剤にあった。

それと同じようなことが今、現実に行き起きているというのか！？
だとしたら、ゲームを買いに行くところではない。即刻、家に帰らなければ！

匠が行動するよりも早く、次の現象が起こりつつあった。
足もとに魔法陣のような、奇怪な紋章が刻み込まれる。

それは火の線で描かれていて、真暗だった広場に、キャンプファイヤーにも似た、まぶしい灯りが周囲を包みこんだ。

「なんだ！？」

あたりには火の粉が舞い、もう逃げるところではなくなっている。
必死に逃げ道を探そうとしたが、火の道が邪魔みちをして、なかなか広場の外へ出ることができない。

(……もう、おわりだ、……)

そう、匠は理解した。たぶん、自分達は悪質のテロに巻き込まれたのだろう。

言ってしまうことは簡単だったが、それでも、なかなか納得することができない。

おとなしく家にいればこんなことにはならなかったのだろうか、と考えたが、この規模の大きさでは、どこにいても同じことだろう。そう自分を思い込ませて、匠は目を閉じた。

決して、安らかとは言えない最期。

麻酔銃で眠ってさえいれば、決して気づかされることのなかった最

後。

せめて、それを実感できたことを神に感謝しよう。
それでは…、さようなら…

「君は、まだこんなところへいたのか」

「へ…？」

この世に別れを告げようとした矢先、思わぬ人物がいることをすっかり忘れていた。

「案山子は、わたしが喰いとめた。もうだいじょうぶだ」

少女はさも当然の如くそういった。

まるで、いままでおびえていて、目も開けられなかった子供に、お化け屋敷から出たことを知らせてあげたかのように。

これが、進藤匠と千影しんどうたくみ ちかげの最初の出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7413f/>

黒竜の雛

2010年11月30日03時26分発行